

懇話会

SALOON REPORT

講演録

により、産学官連携の地域振興拠点（ハブ）としてつくれられた。大変期待を込めてつくられ、いろいろな地域の方々との連携、特に産業界の方々との連携が行われてきた。地域の産業もどんどん成長し、広く日本中、そして世界中の大学や関連機関と連携しながら発展してきた。サイエンス・クリエイト自身の役割は初期に比べ幅広くなっているが、産学官連携の地域のハブとしてたくさんの事業を行っている。

第三八〇回東三河産学官交流サロン 「ひとを育て、まちを創る／社会人キャリアアップ連携協議会が目指すもの／」

社会人キャリアアップ連携協議会 会長

豊橋技術科学大学 前学長 横 佳之氏

●「技科大」から「サイエンス・クリエイト」へ

豊橋技術科学大学の学長を務めていた頃から、市民の方から「大学の敷居は高い」とよく言われていた。いろいろと努力をして今は随分変わってきたが、市民の方にはそうした認識が相変わらずあるように思う。私は大学を退任し、大変お世話をなったこの地域にお礼をしなければならないと思い、豊橋技術科学大学での経験を活かし、サイエンス・クリエイトで何か役に立つことができればと考えていた。

サイエンス・クリエイトは30数年前に豊橋技術科学大学の創立



横 佳之氏

産学官連携事業として産学連携協同研究のお世話をしたり、特にこの地域は農業地域であるため、食の産業クラスター関連事業としていろいろな食の関連事業を行っている。また、若い方の起業支援をする事業や、いろいろな産業のコアとなる情報関連の事業なども行っている。植物工場については、数年前に、当時豊橋技術科学大学の三枝正彦先生がIT食農先導士の事業を始められて以来、植物工場について意識が高まったこともあります。いろいろな支援を受けながらサイエンス・クリエイトが立ち上げている。

そうした中で、敷居の高くないうびの場を提供できる体制づくりをしたいということで、サイエンス・クリエイトや関連の自治体、大学などの協力を得て社会人キャリアアップ連携協議会がスタートした。

●なぜ「社会人キャリアアップ連携協議会」？

社会人キャリアアップ連携協議会の根底は大学にあるが、人材が地域の活力になるということは言うまでもない。「学び直し」ができるシステムをつくることが、この地域にとって大事なことである。欧米では学び直しは当たり前であるが、今の日本の社会では自由にならないため、働きながらでもしっかりと学び直しができ、新しい技術について対応できるようなシステム作りをしたい。

先ずは、地域の方々の理解と協力が必要である。サイ

エンス・クリエイトが数人で頑張っていてもどうしようもないため、体制づくりが必要となる。この地域で、シーザーがある。一方で、商工会議所、東三河県庁、

でも既にたくさんの人材育成の事業が行われているが、全体としてシーザーとニーズのマッチングの現状を調査し、それを基にこの地域全体でどのようなものがあるかという情報を共有できるシステムの構築を進めるために、社会人キャリアアップ連携協議会を立ち上げることになった。

サイエンス・クリエイトと東三河広域経済連合会、愛知県東三河県庁、豊橋市、豊川市、田原市、そして豊橋技術科学大学、愛知大学、豊橋創造大学、愛知工科大学の4大学の協力を得て、それぞれの代表者の方にお越しいただいて、平成26年10月に設立総会を開催した。それから実際に準備をして、キックオフシンポジウムを行ったのが、平成27年3月である。

「ひとを育み、まちを創る」というこの形が、産金学官4本の矢による東三河の成長戦略である。産学官というのはよくあるが、ここに金融が入ることでしっかりと組み立っていくのだというふうなことを広く伝えるために、電気通信大学前学長で一般社団法人コラボ産学官創立者の梶谷誠先生に、設立シンポジウムで基調講演をしていただいた。

梶谷先生には、東京を中心北は東北から南は九州まで、たくさん国立大学や私立大学、産業界、自治体を集めて実際に地域の連携をしてきた経験を語っていただいた。金融がないと、連携はなかなかうまくいかないということである。特にこの「金」というのは、地元の信用金庫であるとおっしゃっていました。それに基づいて、この地域でどうあるべきかと、いうパネルディスカッションも行った。ここに金という言葉が入ったのは、新しい視点だろう。ここで改めて、地域の活性化には産金学官の連携が必要であると認識したわけである。

●シーズとニーズのマッチング

この地域の大学やいくつかの優れた技術も含め

東三河広域経済連合などいろいろなところから、こうあつたらしいというニーズがある。そういういたシーズとニーズを、上手にマッチングさせるシステムを作る必要がある。予算は限られているため、まずはハブのようなものを作つていこうということで、こうした連携はそれなりに意味のあることであると考えている。

ネット上で、アマゾンや楽天、あるいはグーグルやヤフーでキーワードを打ち込めば、それに相当するものが出てくる。同じように、ここに来ればこの地域のどのようなニーズやシーズがあるのかが一括して見えるシステム作りをしたいというのが、一つのイメージである。

最初に、ニーズとシーズがどのようにマッチングしているのかを、広い目で見直すということを行つた。ニーズとしては、主に東三河総合開発ビジョンの諸項目、企業や自治体の求める課題・人材、地域の方々の要望などがある。それに対してシーズは、各大学の公開講座や研修コース、東三河広域経済連合会の各種の研修コース、自治体の研修コース、あるいはサイエンス・クリエイトが行つていているコースなどがある。ニーズとシーズがきちんと対応しているのかどうかを見るために、それらを組み合わせてマッチングのマップのようを作つた。

主に東三河総合開発ビジョンの項目にあるような問題や課題をニーズ項目として挙げ、自治体、産業界からのニーズ、大学のシーズを並べてマップにするなど、それなりには合つていることが分かつた。いくつか空白の場所はあるが、商工会議所のグループはそれなりに必要なものを置いていて、自治体もそれなりに必要な求める人材のコースを行つてはいる。全体として大きく空白の場所があるわけではないため、あとは上手にメンバーの間で共有しながら、いろいろな方々が相互に使えるシステム作りをしていきたい。またいろいろな情報をメールマガジンで発信し、必要なコースなどを取つていただくということも行つてはいる。

●人材育成講演会など

そしてもう一つ、独自に人材育成のための講座や講演会を開く必要がある。第1回は、キックオフで梶谷先生に講演をお願いした。平成27年度人材育成講演会として、昨年4月には元旭化成のアメリカ取締役副会長の古山俊之氏に、「製造業の再生に軸足を移しつつある米国」ということで、アメリカ政府全体も産業界の再生に軸を置きだしたという状況を伝えていた。お話の中で、個別の部品の優位性ということではなく、トータルのシステムとして優位性を持つという方針で、アメリカが製造業を盛りたてているのだとおっしゃっていたのが印象的であった。

第2回目は「新産業・成長産業としての農業参入」ということで、(株)果実堂代表取締役社長の井出剛氏に、農業をいかに産業化するかについてお話ししていただいた。井出氏は、もともと工学博士である。いかに農業を活性化するかというときに、第1次産業で作るだけではなく、それを加工して、日本の市場全体を支配している第3次産業まで組み込んだシステムを作らなければならぬということで、宅急便のヤマト運輸と組んで、製造から販売ルートまで全てを一括したシステムを作り大成功している。

第3回は、豊橋技術科学大学の高嶋孝明教授に、「東南アジアとシリコンバレーから日本のグローバル化を眺めて」と題して、国際化について高嶋先生の実際の感覚をお話しいただいた。

また人材育成シンポジウムとして、今年の2月に合同シンポジウムを開催し、今評判のドローンの日本の第一人者である野波健蔵氏をお招きした。産業革命との感覚をお話しいただいた。

道の駅を造り、どのように地域を活性化させたのかというお話ををしていただき。その他、8月に農業関連の講演会、10月には産業振興をテーマとした講演会を予定しており、地域のいろいろな要望にお応えできる企画を考えている。

そして、今後に向けて

先ほどニーズとシーズの空白はあまりないとお話ししたが、実際に何かしたいというときに、必要なのは人材のマップである。このような先生がいる、こういった人材がいるというマップにしなければ、なかなか分からぬのである。ニーズに対してシーズを対応できる先生がどこにいるのかと、いうことが分かるような、人材マップを作成する準備をしているところである。また人材育成講座のコースを受けた際に、認証やキャリアアップにつながるモデル等の仕組みを作りたいと考えている。

そしてもう一つ新しく始めたいと考えているのが、互いの顔が見える少人数での勉強会や交流会である。何十人の人が集まると簡単には交流できないが、20~30名程度の人数で、それぞれにテーマを決めて、それに関連する方々が集まることによって勉強会になっていく。特に企業の方と学の方とが一緒にになり、勉強会でお互いを知り合うことで、そこから新しい連携につながつていいけるような場を作つていただきたい。

私たちの活動はまだ断片的な部分もあるが、この地域の活性化につなげていきたい。既に各大学ではたくさんの方々が活躍を行わせているため、それらを側面から紹介し、たくさんの方が大学にある知を活用できるような仕組みにしたいと考えている。

産金学官がサポートする「知」のシーズを、地域の活性化に役立てていきたいと思っている。今後も社会人キャリアアップ連携協議会へのご理解、ご協力を是非お願いしたい。